

戦後1952年までに来校された 宣教師たち

河野 信子

○序

私は1947（昭和22）年に西南初の女子学生の一人として、旧制専門学校英文科に入學した。3年間の課程を終えて卒業し、そのまま1949（昭和24）年に開校していた新制の西南学院大学の3年に編入し、2年後の1952（昭和27）年文学部英文科の第1期生として卒業した¹。西南に在學した5年間は、戦後の混乱がまだ治ったとはいえ、日本の社会も、西南自体も激動の時であった。その頃に西南に来校された宣教師たちの思い出を記すことにする。

○戦後の西新町、西南学院周辺

目を閉じると、戦中、戦後の西南学院周辺の光景がはつきり甦ってくる。脇山口から百道の海岸にかけて、左側には修猷館、その南角の高台には野外のプールがあり、市道を挟んで右側には何軒かの民家に続いて角には木造の小さな西南学院バプテスト教会が建っていた。道路を越えて、南側には多目的に使われた西南会館と呼ばれていた畳敷き一間の広い集会場と、それに続いて学院の小さな図書館の建物と書庫。その先は運動場で、北側の隅には戦後学生、教職員とその家族が雑居した三階建ての大変粗末な百道寮があった。その先はもうすぐ百道の海岸だった。道路はどれも舗装されておらず、現在の道幅の半分くらいだっただろうか、人の通りも少なく、もちろん車などは一台も走っていなかった。

西南のキャンパスも、市道を挟んで東側には中学部の校舎といくつかの校宅、西側には専門学校の本館と教室の入った灰色モルタル作りの建物と2軒の宣教師館、西新小学校との境に近い所にもう1軒の小さな宣教師館があった。神学部が使っていた古い木造教室が一つと戦時中に建てられた急拵えの教室も2、3あったが、学院の敷地

1 1952（昭和27）年7月に私がアメリカ留学に出発したため、この区切りにした。

は狭く、現在の図書館と2号館の間くらいまでであった。

1945（昭和20）年6月19日の福岡大空襲では、西南の校内にも相当数の焼夷弾が降ってきたが、幸いにその殆どが砂地にのめり込んで大事に至らず、既存の建物はどれも被害を受けることなく残ったのである。中学部も専門学校も学生たちは、多数が八幡製鉄所やその他の所に徴用されていて留守であった。

こうして、終戦までは西南は西南学院中学部と、西南学院経済専門学校という旧制度の男子学生のための私立学校として、西新町の一角にあった大変規模の小さな学校であった。しかし、戦後は教育制度の大改革により、中学部は新制の西南学院中学校と高等学校の2校になり、専門学校は4年制の男女共学の新制大学として新しく歩み出すことになる。戦争直後の混乱と欠乏の只中で、大した財力も人材も揃っていなかった西南にとって、短時間の間に政府の要求する新制度への転換は、どんなに大変な仕事であったかと想像に余りある。この時代に、修士号や博士号を持っていた宣教師の先生方の来校がどれ程大きな力になったことであろうか。1949（昭和24）年に西南学院大学は学生数約260名で新しい出発をしたが、旧制度の専門学校は1951（昭和26）年の完了時までそれと並行して存続したのである。

○1946年 E. B. ドージャー先生の西南学院再訪

戦後、1年と少したった1946（昭和21）年11月、町には闇市、占領軍、復員軍人などで溢れていた最中に、アメリカの南部バプテスト外国伝道局の使者として、エドウィン B. ドージャー先生が来日し、西南を問安²された。このエドウィン先生は西南学院の創立者チャールズ K. ドージャー先生のご子息で、戦前にも宣教師として西南に関係していたが、開戦直前に日本を離れて、戦時中はハワイに滞在していた。この来日の時に、学院関係の方々やバプテスト教会の牧師たちと、これからのことについて、いろいろ大切な相談がなされたと思われる。当時の占領軍指令部は、日本にキリスト教の影響を広めたい方針³、宣教師を送りこんだり、聖書を配布することに熱心であった。この方針とも相まって、エドウィン先生を介して南部バプテスト外国伝道局は人的、財的支援を約束したのではないであろうか。その後、西南は多数の宣教師たちを迎え入れることになる。エドウィン先生はこの後も東京に住んで、外国伝道局と日本の西南を含むバプテストの働きのための橋渡しの役目を果たされたのである。

2 写真『西南学院大学50年』、76頁参照

3 『天皇がバイブルを読んだ日』レイ・ムーア編 講談社 1982年

○戦後最初に西南学院に着任された2人の宣教師

1947(昭和22)年夏に、戦後初の宣教師2人が西南に着任した。アルマ O. グレーヴス先生とタッカー N. キャラウェイ先生である。お二人は共に専門学校で英語科目を担当されたが、グレーヴス先生は戦前1938(昭和13)年にも西南学院高等学部で教えておられたので、戦後の来日は2度目であった。キャラウェイ先生は初来日で、夫人と4人の娘たちをハワイに残したままの単身赴任であった。既存の3軒の宣教師館には、戦時中からその1軒に水町義夫院長一家が住んでおり、小さい方のボールデン館には藤井泰一郎一家7名が住んでいたのだから残るは1軒だけであった。それで来校された男性と女性の2人が一緒にこの1軒に住むことは適切でない判断され、暫くの間だったが、夜になるとキャラウェイ先生は我が家の二階に泊まりに来ていた。背の高かった先生に丈の短い日本のふとんや蚊帳の生活はどう映ただろうか。この後先生は、現在の吉村病院の辺りにあった藤田さんという家の二階に間借りし、家族が来日されるまで不自由な生活をされたのである。当時の占領軍の方針で食糧難の日本に入国する宣教師はそれぞれ1トンの食料と住宅を持参せよという規定があったそうで、キャラウェイ先生の朝食はピーナツバターだと聞いていた。このときはまだ30歳と若かった先生は、暫くの間とはいえ、家族と別れて、貧しい戦後の日本でわびしい生活を余儀なくされ、余程こたえられたのか、一度禅僧のように頭を丸めてしまったことをよく覚えている。その格好でよく百道の海岸に泳ぎに行っていたが、家族の到来で東区の方に移られ、そこはやがて東福岡バプテスト教会の発祥の地になる。

一方のグレーヴス先生は、校内の宣教師館に住んで、次々に来校する新しい宣教師とその家族の世話をした。もちろん専門学校や大学のクラスの授業と並行してのことである。

先生は1947(昭和22)年に再来校して、1976(昭和51)年に引退帰国するまで、専門学校や大学の大勢の学生たちに深い印象と影響を残された方である。戦後の来日の時、先生はまだ40歳という若さであった。当時は珍しかった女性の大学教師に、生の英語を直接教えてもらった体験は、当時の学生たちには強烈な体験だったようだ。その頃の学生たちで1948(昭和23)年に専門学校に入学したということで結びついている「二三会」というグループがある。その結成23年を記念して出版したメンバーによる小さな文集があり⁴、その文集のあちこちにグレーヴス先生との生き生きとした思い出が出てくる。

4 『原点』西南二三会誌 青松社 1981年

先生の出身はアメリカのルイジアナ州のフランクリントンという町である。物静かな、落ち着いた方であまり自分の個人的な話はされない方だったが、残されている書き物からみると⁵、幼い頃から何かと演じることに大きな興味があったようだ。大学ではシェイクスピアやミルトンなど英語の古典を専攻し、修士号を持っていた英語の専門家だった。戦前来日の折に、すでに規定の日本語の勉強も終えており、日本語は堪能であったにもかかわらず、学生たちには必ず英語で話しかけられていた。学生の勉強、訓練のためと思われたからであろう、もちろんクラスでの授業は全部英語で講義された。

○忘れられない E. S. S. の英語劇

クラスでの授業の他に、グレーヴス先生は実にいろいろな方面で活躍され、その多くは西南の歴史に残るような出来事であった。最初に思い出すのは、1951（昭和26）年毎日新聞社主催の学生英語弁論大会で豊田佳日子氏（元西南学院高校教員）が見事優勝したことである。E. S. S. のメンバーであった豊田氏とグレーヴス先生の二人三脚で訓練に取り組んだ成果だったのであろう。これは当時の西南にとって大変嬉しいニュースであった。しかし、その時の優勝杯は間もなく盗難に遭い、泥棒が捕まった時にそれはもう溶かされて銀の一塊になってしまっていたという後日談までついている。

E. S. S. といえばグレーヴス先生指導による英語劇の公演も忘れることはできない。戦後來日されて、はじめの何年かは英語劇もシェイクスピアの作品ではなかったが、1950（昭和25）年あたりから毎年のようにシェイクスピアの劇に変わっている。初回は「ヴェニスの商人」だったように記憶している。結局このシェイクスピアの英語劇は、先生が1976（昭和51）年に引退されるまでに、何と通算25回行われた。英語の発音の指導に加え、演出から大道具、小道具に至るまで、先生は目を配られた。これら



幅広い才能を発揮されたグレーヴス先生

5 Alma O. Graves, *So Hollow'd and So Gracious Is the Time* 梓書院 1976年

の劇に参加して、自分のパートを持った学生たちはそれぞれ西南時代の大切な思い出として覚えているに違いない。

○ “Ah, Seinan!” と生け花

1947（昭和22）年から西南は男女共学となり、キャンパスは大変賑やかになった。女子学生の数は多くはなかったが、これまでとは異なった雰囲気になった。女性の専任教員はグレーヴス先生と日系二世の山永百合子先生の二人のみだった。そのためか女子学生たちに対して、グレーヴス先生はいろいろと配慮され、女子学生の会を作ったり、女子卒業生のために自宅を開放して女子同窓会を開く手伝いをされた。この会は10数年続いたと覚えている。

西南大には、第二校歌のようになっている英語の歌 “Ah, Seinan!” がある。何かの折には必ずといってよいくらい歌いつがれてきている。この歌詞は1949（昭和24）年に、グリークラブの要請をうけてグレーヴス先生が作られたものである。先生は詩の方面にもその才能を発揮して、相当数の詩を書き残している。

学外においても、「イケバナ インターナショナル」というグループに所属し、世界的組織の中で日本の文化の一面を紹介している。

また学外の働きの中でも特に注目すべきは、西南学院教会での日曜日朝のバイブルクラスである。大勢の青年たちがこのクラスに参加して、その中から多くの方が信仰に導かれていった。これは先生の在日中、絶えず続いた奉仕だったし、先生の書き残された文章をみると、その深い信仰があちこちに語られている。教会の礼拝もいつも決まった席に座っていたのをよく覚えている。

戦時中の数年を除いて約35年、文字通り人生の大きな部分を日本と西南のために捧げられたグレーヴス先生は、1976（昭和51）年に大勢の友人たち、卒業生たちに見送られて、69歳で故郷レイジアナ州に帰られた。「もし40年前に自分の人生を巻き戻すことが許されるなら、もう一度同じように西南で働きたい」との言葉を残している。帰国されてからは再度日本の土を踏まれることなく、2000（平成12）年クリスマスの日に故郷で亡くなられた。

○このほか1952年までに来校された宣教師たち

グレーヴス、キャラウェイの第一陣に続いて西南には次々に宣教師たちが着任した。W.M.ギャロット夫妻、M.F.モアヘッド夫妻、G.H.ヘイズ夫妻、E.L.コーブラ

ンド夫妻、J.E. ウッド夫妻である。W.M. ギャロット夫妻は戦前に引き続いて2度目の来日であったが、今回は来校間もなく1948（昭和23）年に戦時中西南を守ってこられた水町義夫院長の後を受けて第5代の院長と学長の任を負われることになる。ウッド夫妻は外国人に英語を教えるための特別の訓練を受けての来校だった。このほかにも中国の政変によって中国から引き揚げて来たP. タッド、L.C. グラスという年配の女性宣教師たちもいた。家族持ちの宣教師の多くは構内に住んだので、小さな可愛らしい金髪の子どももたくさんいて、子どもたちは学生たちの格好の遊び相手になっていたものである。

○包容力のあったコーブランド先生

これらの宣教師たちの中でも、1949（昭和24）年夏に来校されたE.L. コーブランド先生は特に印象の深い方であった。大きな体格の持ち主で、年齢の若さにも拘わらず見るからにどっしり落ち着いて、その外見そのままに包容力のある方であった。

先生は1916（大正5）年、西南学院創立の年に、ウエスト・ヴァージニア州で誕生し、24歳になるまで山の材木を切って運び出すという肉体労働者として働いたのである。24歳のときに一念発起してバプテスト系の短大に入学し、以後9年に亘って勉学を続け、最後は東部のイエール大学神学部で学位を取得された。この9年に亘る学生生活は決して楽なものではなかったようで、奨学金とアルバイトに頼る苦学生であった。学位取得後、イエール大学で1年間の日本語の研修を終えてから、33歳で来校された。西南の構内の南の隅にプレハブ式の簡素な住宅を建て、ルイズ夫人と二人の幼い娘たちと住んだが、この家屋も当時の占領軍の要求の一つでアメリカから持参したものであった。食料も一人1トン持参という規定だったため、借金してそれを整えたと聞いている。しかし、戦後すぐの貧しい日本の食糧事情から、持参した食料はたった4カ月でなくなった由。きっと日本の友人たちの窮状を見るに見かねて、自分たちのものを分け与えられたに違いない。同行された二人の幼女のうち次女はまだ生後6カ月の赤ちゃんだったが、来日してから身体の一部に麻痺があることが判明し、先生ご夫妻はこのことのために苦労された。戦後の日本の貧しさに驚き、宣教師たちが軒並み体験した泥棒にも入られて、衣類をごっそり盗まれた体験や、お隣の西新小学校の生徒が土曜にも半日登校していることや自分たちで教室や校庭の掃除をしている姿など驚かれる異文化体験もたくさんあったようだ。

神学部での専門の授業、および大学のキリスト教学、これは英語で講義されたので、受講希望の学生たちはまず英語の試験を受けた。学校の仕事以外にも、西南学院教会



温厚で博学だったコーブランド先生

で、また近隣の伝道所に出かけて、たくさん説教を行った。西南学院教会の尾崎圭一牧師が下関の教会に転出されたので、先生はその後を受けて無牧⁶の教会の牧師代理のような役目も負うことになった。先生の日本語は来日当初より相当お上手だったが、短い間にすっかり説教ができるまで上達していた。

1952（昭和27）年のクリスマスには西南学院教会で13名の方のバプテスマを授けられ、冷たい水の中に長い時間立っていたのでさすがに足がしびれてしまったという体

験もあったそうだ。

1952（昭和27）年には、第5代のギャロット院長・学長が休暇のために帰国されることになり、院長、学長の職を辞任された。コーブランド先生はその後を受けて、これまでまったく体験したことのない行政職に就かれることになった。第6代の院長と、数か月であったが学長職も兼任された。院長職は先生が宣教師を辞任して帰国されるまで4年続いたが、その間にも中学、高校でむづかしい問題があったようである。来日以来まだ3年、わずか36歳という若さで、未知の大任につき、その職責を果たされたことは日本の同労者たちに強い印象を残したものと思われ、約20年後の再来校に続いていく。生活面でも西新校地から、干隈の校地に本格的な宣教師館もできて、ギャロット、ヘイズ両家と共に移転された。そこでさらに二人の娘たちが誕生したが、彼女たちは自分たちのことをジャパングールと呼ぶようになり、後々まで自慢していた。

コーブランド先生の優れた学識と温厚な人柄は、アメリカの友人たちの間でもよく覚えられており、いろいろな方面から帰国の要請があった。遂に「ノース・カロライナ州に新設されたサウスイースタン神学校の伝道学の教授として帰ってくるように」という友人を介しての招聘が届き、先生ご夫妻は祈りに祈って、次女健康上の問題も一要因だったと思われるが、日本での宣教師としての働きを辞任することを決意されるのである。1956（昭和31）年のことで、先生は一人でヨーロッパを経由して、夫人は4人の子どもたちをつれて一足遅れて別路アメリカに帰国された。

6 専任の牧師がいない状態。

それ以来約20年、先生は優れた説教者、神学校教授として、あちらこちらの集會や教会で説教したり、講演したりされた。保守的なアメリカの南部バプテスト連盟の中で先生は、広い視野の持ち主として貴重な存在だったが、少数派の一人で、対立者も多かったようである。人種差別を批判したり、エキュメニズム（世界教会）についての考え方を大胆に発言していた。こうして神学校教授としても、説教者としてもすべて軌道にのり、定年を目ざすばかりの1976（昭和51）年、先生60歳のときに、まったく思いがけぬことに、西南学院理事会から再度の院長就任の要請が届いた。夫人もその当時ノース・カロライナの州立病院でソーシャルワーカーとして相当の地位にあったが、お二人とも熟慮と祈りの末に西南の申し出を受ける決心をされたのである。定年を間近に控えて専任職を辞めることは、いろいろな面で不利益を被ることであり、お二人は随分犠牲を払われたようである。第5子で長男のルーク君は、このときまだ高校生であったが、彼自らの意志で一人アメリカに残って下宿生活をするようになった。「故郷の人々が助けを求めているのなら行きます。」という決心で1976（昭和51）年春に先生の2度目の来校が実現したのである。

先生は一期4年間、1980（昭和55）年まで、西南学院第12代院長として無事に役目を果たされた。この4年間も、前回と同様に、学校の行政的責任、神学部での授業に加えて、木村文太郎牧師辞任後、無牧になった西南学院教会の協力牧師としても働かれた。在任中に学院のために相当力を入れて進められていたある計画が最終的に挫折し、苦い思いをされたことや、大学と同窓会との間にくすぶっていた問題解決に当たられたことなどが思い出される。

1980（昭和55）年任務を終えて帰国した先生にはもう専任の職はなく、あちらこちらのバプテストの神学校や大学で短期間ずつ教える生活になった。その間に保守化してしまったアメリカの南部バプテスト連盟について、その歴史的背景や問題の指摘、鋭い批判の書を1995（平成7）年に⁷、さらに2001（平成13）年には370ページに亘るユーモア溢れる自伝⁸を出版して、その一生を振り返っている。定住されたノース・カロライナ州のレイ市では、第一バプテスト教会を基点にして、その近郊に出張してきている日本人とその家族のために、夫人ともどもバイブルクラスや文化交流の会を開き、また同市に新設された日本人学校の校長も暫く勤められた。

しかし、ますます保守化して固まっていく南部バプテスト連盟に留まることをよし

7 E. L. Copeland, *The Southern Baptist Convention and the Judgment of History* (Rowman and Littlefield Publishing Co., 1995) 日本語訳：八田正光訳『アメリカ南部バプテスト連盟と歴史の審判』新教出版社2003

8 E. L. Copeland, *Memoirs of a Geezer* (McClain Printing Company, 2001)

とせず、1999（平成11）年にはこれまでの長い関係を絶って、ルイーズ夫人と共に、アメリカンバプテストに連なるプーリン記念教会に転会され今日に至っている。先生は現在92歳を目前にして心身ともにすっかり弱られたが、夫人の手厚い介護をうけて、レイ市に在住している。

先生はその生涯を通して、地位や権力になびかず、簡素な生活を貫き、信仰に基づく信念に従って誠実に任務を果たされた方である。

こうして60年前の西南学院大学草創の頃を思い返してみると、日本人の教師陣も、大勢の宣教師たちもまだ若く、学生たちは年齢も背景も全くまちまちだったが、温かい家族的な雰囲気と、これから何か創り出すのだという意気込みに溢れていたように思われる。物質的には本当に貧しい出発であったが、それをカバーする何かが確かにあった。

（2007年11月記）